

丹精込めたパンジーで、子どもたちの門出を祝う――

阪本でパンジー栽培を営む松浦夫妻。妻の五百子さんは、自らの母校でもある初倉小学校に息子が入学した年から40年以上、卒業式に飾るパンジーを贈り続け、遅しく育った子どもが巣立ちに、花を添えています。

【ひ孫の代まで続けたい】

「学校には、一番良くできたパンジーを届けています」と笑顔で話す五百子さんは、息子の小学校入学をきっかけに母と協力して、毎年卒業式に飾るパンジーを学校に提供してきました。子どもたちの晴れの門出に、花を添えて祝いたいという思いで始めたこの活動は、孫が巣立った今も続いています。「ひ孫の代まで続けられたら、うれしいです」と元気いっばいの五百子さんについて「苦労を乗り越えて、家内はよく頑張っ



てきたんですよ」と、側で見守ってきた達夫さんが教えてくれました。

【子を感じる母の気持ちで】

8月下旬に種をまいたパン

というときには、昼夜を問わず外に出て、苗を守るのに必死だったそうです。「花を育てることは、子どもを育てることと同じ。台風など、どんなに厳しい状況でも、子ども



初倉小卒業式のパンジー提供者（阪本）

まつうらいほこさん・まつうらたつおさん
松浦五百子さん・松浦達夫さん

ジーは、10月下旬に出荷の時期を迎えます。この間、最も恐れるのは台風。この時ばかりは勤め人だった達夫さんも加勢し、風よけシートや壁を設置するほか、いよいよ上陸

もの成長を願う母親のように、守ってあげなくちゃって一生懸命なんです」。そんな五百子さんの思いを知る達夫さんも、母親が亡くなってから本格的にパンジー作りに加

わり、五百子さんをサポートしています。しゃがみ込んで行う花摘みなど、手入れは体にこたえる動きばかり。夫婦揃って楽しく作業できることも、ずっと続けて来られた理由の一つかもしれません。

【卒業式に参加して】

ある年、いつものようにパンジーを届けに学校へ行く時、卒業間近の6年生たちが勢揃いして「私たちのためにありがとう」とあいさつしてくれたといいます。子どもたちの成長を目の当たりにした五百子さんは、感激で胸が一杯になったそうです。

今年、五百子さんのもとに卒業式の招待状が届きました。「悩んだのですが『頑張って育てた花なんだから、花と一緒に出席させてもらったら』って、夫に勧められました。遅しく育った子どもたちが、お花畑を歩いているようにうれしかったです。優しく思いやりのある大人になって、人生のお花を一杯咲かせてほしいです」と、喜びを述べてくれました。



大輪のパンジーに彩られた初倉小卒業式

Shimadian File #47

